様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２０４１

研究課題名（和文）ハーバーマス『公共性の構造転換』の時間・歴史構造とその生成および現代的意義

研究課題名（英文）The early Habermas's concept of time and history, its development and the relevance to contemporary critical theory

研究代表者
飯島　祐介（Iijima, Yusuke）

東海大学・文化社会学部・准教授

研究者番号：６０５４８０１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（1962年）は、市民的公共性の解体傾向の認識とその再生への期待との相反によって引き裂かれた作品として理解されてきた。本研究は、この矛盾・分裂にも関わらず、それを整合的・統一的に読むことは可能かという問いを設定した。本研究は、同時期のシェリング論を前提にすることで、それが可能であることを明らかにした。ハーバーマスは、もうひとつの神（＝人類）の自由の濫用による腐敗から、他ならぬそのもうひとつの神（＝人類）の再起によって解放されるという論理を、シェリングに読み取っていた。この論理によって『公共性の構造転換』は構造化されており、上述の矛盾・分裂は解消される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アクセル・ホネットを中心とする現代批判理論は、今や規範的成果をもたらしてきたメカニズムが、同時にその失効をもたらすメカニズムにもなっていると主張する。この主張によって、現代批判理論は目指すべき社会像を喪失しかねない事態に陥る。本研究は、この事態に対して、ハーバーマスの『公共性の構造転換』を立ち返るべき遺産のひとつとして提示した。すなわち、本研究は、『公共性の構造転換』が、退歩をもたらすものこそその退歩を取り戻しうるという論理によって構造化されていることを、そのかぎりで上述の事態に対するありうべき応答のひとつを内包していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： The Structural Transformation of the Public Sphere, which was written by Juergen Habermas and published in 1962, has come to be understood as a work falling into a tension between the recognition of the disintegration of the public sphere and the hope for its reconstruction. This study aimed to interpret it so that the tension could be resolved. The early Habermas was influenced by the philosophy of Schelling. According to the Habermas's interpretations of Schelling, the corruption is caused by the abuse of the freedom of another god (=humanity) and thus can be removed by this same god (=humanity). Insofar as The Structural Transformation of the Public Sphere is structured by this logic, the tension mentioned above can be resolved.

研究分野：フランクフルト学派を中心とする社会学史

キーワード：ハーバーマス　公共性の構造転換　時間・歴史構造

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換――市民社会の一カテゴリーについての研究』（1962 年）については、ヴォルフガング・イェーガー『公共性と議会主義――ユルゲン・ハーバーマスへの批判』（Jäger 1973）を嚆矢に、一定の研究の蓄積がある。この蓄積においては、ドイツ国法学との関連が、とくにカール・シュミットの議会主義批判をハーバーマスがどのように受容したのかが、問題にされてきた。このハーバーマス-シュミット問題については、1980 年代後半にエレン・ケネディの論文（Kennedy 1986）を発端とした論争が生じ、ハルトムート・ベッカーによる総括的な検証が提出されるにいたっている（Becker 2003=2015）。そこで、収斂にいたった見解を、次のようにまとめることができる。市民的公共性の解体傾向に焦点を合わせることにおいて、またその記述・分析において、シュミットの議会主義批判を継承しながら、なおも市民的公共性の再生に賭けることにおいて、代表具現的な公共性を志向するシュミットとは異なること、である。この見解によって、ハーバーマス-シュミット問題それ自体には、さしあたりの決着がつけられることになった。

しかし、この決着によって、『公共性の構造転換』の学説研究には、かえって解き難い問題があらためて強調されるかたちで提起されることになったと考えられる。『公共性の構造転換』については、市民的公共性の解体傾向の認識と、その再生への期待との相反が気づかれていたが、ハーバーマス-シュミット問題の解決は、この相反をシュミット的志向と反シュミット的志向との矛盾に高めた。『公共性の構造転換』は、シュミット的志向と反シュミット的志向との矛盾によって引き裂かれた作品として現前することになる。

２．研究の目的

『公共性の構造転換』を、上記の矛盾・分裂にかかわらず、整合的・統一的に、ひとつの作品として読むことはなお可能か、可能であるとすれば、それはいかにして可能かを、本研究の核心をなす学術的な問いとして設定した。本研究は、この問いに答えることを通して、アクセル・ホネットを中心とする現代批判理論が直面しているユートピアの再生という課題に応答するための手がかりを得ることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、上記の問いに答えるために、ハーバーマスが同時期に展開していたシェリング論に注目した。ヨーゼフ・クーラツは、ハーバーマスが『コミュニケイション的行為の理論』（1981 年）で提起した、いわゆる「生活世界の植民地化」テーゼにフリードリヒ・シェリングの思想的影響の痕跡を発見しようと試みている（Keulartz 1995）。しかし、このような試みは例外に属する。ハーバーマス理論を彼のシェリング論に注目して体系的に解釈することは、ほとんど試みられてこなかった。しかし、少なくとも『公共性の構造転換』の時期までのハーバーマス理論に対するシェリングの影響は、過少評価されてはならない。よく知られているように、ハーバーマスがボン大学に提出した博士論文は「絶対者と歴史――シェリング思想における内的矛盾について」（1954 年）であり、シェリング論に他ならなかった。また、1961 年 7 月のハイデルベルク大学での講演を元にした「唯物論への移行における弁証的観念論――神の収縮というシェリングの理念の歴史哲学上の諸帰結」（1963 年）でもまた、シェリングについて集中的に論じている。『公共性の構造転換』以前の、またそれと並行した、ハーバーマスの学術的関心のひとつの大きな焦点は、シェリングの未完の草稿群、『世界時代』にあった。ハーバーマスは、『世界時代』のシェリングによって、ユダヤ教神秘主義の伝統に媒介され、「神の収縮」の観念に辿り着く。本研究は、『公共性の構造転換』の基底には、この「神の収縮」の観念を翻案した、時間・歴史構造が潜在し、シュミット的志向と反シュミット的志向との矛盾・分裂が止揚されていると仮定するものであった。

４．研究成果

（１）ハーバーマスの『公共性の構造転換』は、シェリング論を前提にすることで、整合的・統一的に読むことが可能であることを明らかにした。ハーバーマスは、「唯物論への移行における弁証法的観念論」（1963 年）で、シェリング『世界時代』のものとして次のような時間・歴史構造を析出する。すなわち、もうひとつの神（＝人類）の自由の濫用による腐敗から、他ならぬそのもうひとつの神（＝人類）の再起によって解放されるという時間・歴史構造である。この時間・歴史構造は、さしあたってはシェリング論の枠内で提示されているが、『公共性の構造転換』にも潜在している。すなわち、市民的公共性の解体傾向によって存続する支配から他ならぬその市民的公共性の再生によって解放されるという論理によって、『公共性の構造転換』は構造化されている。ここに、『公共性の構造転換』に見出されてきた矛盾・分裂――市民的公共性の解体傾向を主張しながら同時にその再生に期待すること――が言わば仮象として解消する可能性が担保される。

（2）（1）で析出した『公共性の構造転換』の時間・歴史構造は、マルティン・ハイデガーにかわってマルクス主義の影響が強くなることで、シェリング論が修正を余儀なくされることで形成されたことを明らかにした。ハーバーマスは、思想形成の初期にハイデガーの影響を受けていた。「絶対者と歴史」（1954 年）のシェリング論は、マルクス主義がその構成に影響をおよぼしはじめてはいた。しかし、それはなお、ハイデガーの思想によって強く規定されていた。その後、マルクス主義の受容が進むことで、ハーバーマスはハイデガーの思想から徐々に離れていくことになった。このハイデガーからマルクス主義への思想的コンテクストの変容によって、シェリングを再論する必要が生じることになった。ここに、「唯物論への移行における弁証的観念論」（1963 年）が登場する。マルクス主義の影響に以前よりも強く規定された、この新しいシェリング論は、そのタイトルにあるように「唯物論への移行」に焦点を合わせるものであった。その結果、もうひとつの神（＝人類）を主体として組み込んだ時間・歴史構造を前面に浮かびあがらせることになった。この時間・歴史構造こそ、『公共性の構造転換』に潜在していたものであった。

（3）クーラツのハーバーマス論には、修正が必要であることを明らかにした。クーラツは、シェリング論に注目してハーバーマス理論の再構成を試みた点で（Keulartz 1995）、本研究課題にとって最重要の先行研究である。しかし、それは「絶対者と歴史」にハーバーマス理論の原型を発見し、そこから無媒介にその後の理論展開を再構成することになっている点で、修正を要する。（2）で明らかにしたように、「絶対者と歴史」のシェリング論はハイデガーの強い影響を受けており、その後のマルクス主義の受容を通して修正を余儀なくされ、「唯物論への移行における弁証的観念論」が著されたと考えられる。「絶対者と歴史」にハーバーマス理論の原型があるとしても、「唯物論への移行における弁証的観念論」におけるその変形を少なくとも考慮に入れる必要がある。

（4）以上のようなハーバーマスのシェリング受容の特徴のひとつに、積極的なものが暴力に転落することに警戒的である点があげられることを明らかにした。当時、シェリングの影響を受けながら理論形成を図っていた理論家は、ハーバーマスだけではなかった。エルンスト・ブロッホもまた、その一人であった。ブロッホは、シェリング受容という点では、かえってハーバーマスに先行していた。ハーバーマスは、ブロッホが彼と同様にシェリングの理性概念――「規制された狂気」としての理性――を受容していることを確認する。この理性概念は、積極的なものが「狂気」を内に含んでいること、そのため暴力――「規制」されない「狂気」――へと転落する可能性を秘めていることを、含意していた。ハーバーマスは、ブロッホのユートピア論がこの可能性を軽視するだけでなく、暴力を認容する余地を残していると強く批判した。ハーバーマスは、ユートピアへの熱情が暴力へと転落することを警戒し、その客観的可能性や実現可能性を社会学によって経験的にチェックすることを要求した。『公共性の構造転換』が社会学的に構成されている理由も、ここにある。

（5）（1）で析出した『公共性の構造転換』の時間・歴史構造は、現代批判理論が直面している、ユートピアの再生という課題に応答するための手がかりとなることを明らかにした。ホネットを中心とする現代批判理論は、「現代の規範的パラドクス」を問題とする（Honneth und Sutterlüty 2011）。すなわち、規範的成果をもたらしてきたメカニズムが今や、同時にその失効をもたらすメカニズムにもなっていると、言い換えると進歩と退歩とが同時相即的となっていると、主張する。この主張によって、現代批判理論は、目指すべき社会像を喪失しかねない事態に陥る。現代批判理論は、ユートピアの再生という課題に直面することになる。この課題に対して、『公共性の構造転換』は、退歩をもたらすもの（＝解体傾向にある市民的公共性）が、その退歩を取り戻すことを可能にするものでもあることを証示する。そのかぎりで、それはユートピアの再生という課題に対する可能な応答を提示しており、現代批判理論にとって立ち返るべき遺産のひとつとなっているのである。

文献

Becker, Hartmuth, 2003, *Die Parlamentarisumusukritik bei Carl Schmitt und Jürgen Habermas*, Zweite Auflage, Berlin: Duncker& Humblot. （永井健晴訳, 2015,『シュミットとハーバーマスにおける議会主義批判』風行社.）

Honneth, Axel und Ferdinand Sutterlüty, 2011, “Normative Paradoxien der Gegenwart: Eine Forschungsperspektive, " *West End*, 8(1).

Kennedy, Ellen, 1986, “Carl Schmitt und die “Frankfurter Schule": Deutsche Liberalismuskritik in 20. Jahrhundert, " *Geschichte und Gesellschaft*, 12: 380-419.

Keulartz, Jozef, 1992, *Die Verkehrte Welt des Jürgen Habermas*, Hamburg: Junius.

Jäger, Wolfgang, 1973, *Öffentlichkeit und Parlamentarismus: Eine Kritik an Jürgen Habermas*, Stuttgart: Kohlhammer.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 飯島　祐介	４．巻 5
２．論文標題 初期ハーバーマスにおける戦後的理性と社会学――ブロッホ批判を手掛かりに	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東海大学紀要文化社会学部	６．最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18995/24344710.5.61	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 飯島　祐介	４．巻 41
２．論文標題 J・ハーバーマス『公共性の構造転換』のシェリング主義的基礎 ： 「進歩の消滅」のもとで実践的であることの可能性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社会学史研究	６．最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 飯島　祐介
２．発表標題 初期ハーバーマスのシェリング論における歴史の構造
３．学会等名 日本社会学史学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関